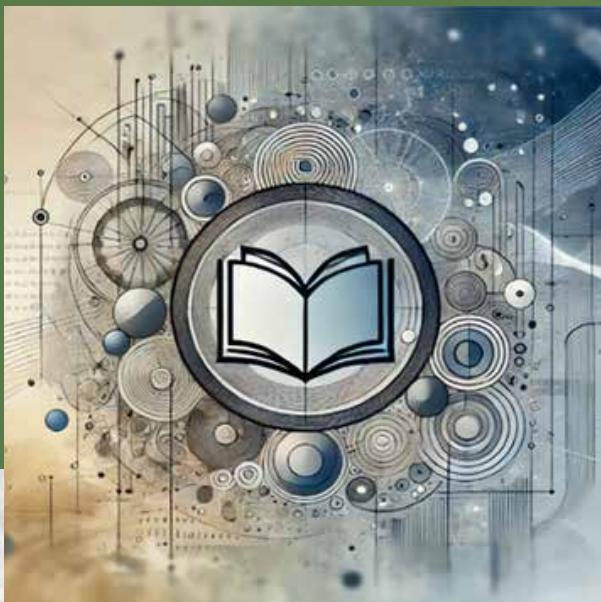


表現学会 メールマガジン



目次

- ♣ 代表理事・事務局長よりご挨拶
- ♣ 会員からのリレー・メッセージ（第6回）
- ♣ お知らせ
（『表現研究』 | 23号投稿 & 第63回全国大会発表者募集ほか）
- ♣ 広報委員会主催第3回オンライン例会報告
- ♣ 表現学会ブログ公開のお知らせ
- ♣ 編集後記

◆ 代表理事・事務局長のご挨拶 ◆

本年度より新たに代表理事となられた、梅林博人先生(相模女子大学)、事務局長・運営委員長となられた茗荷円先生(共立女子大学)より会員の皆さんに向けたメッセージを頂戴しました。

表現学会会員の皆様

2025年6月より代表理事を拝命いたしました梅林博人(うめばやしひろひと)です。どうぞ、よろしくお願ひ致します。

令和に入り、早7年が過ぎようとしています。この間、本学会は、学会広報のさらなる充実に努め、令和5年度に本メールマガジンを開始致しました。『表現研究』第117号には「創刊のお知らせ」が記されています(52ページ)。

ホームページよりも機動性と柔軟性を備えた媒体となるよう、現在は、令和6年度に新設された広報委員会を中心に企画・運営が行われています。まだ芽吹いたばかりの媒体ですから、皆様からの意見も頂戴しながら、本メールマガジンを育てていくことが当面の課題だと思われます。皆様、どうぞ、ご意見ご感想をお聞かせ下さい。今後ともどうぞ、よろしくお願ひ致します。

表現学会の皆様

こんにちは、2025年6月より事務局長を拝命いたしました、茗荷円(みょうがまどか)と申します。若輩者ゆえ、皆様のお力をお借りすることが多々あるかと存じますが、より開けた、楽しい学会になるよう尽力して参りますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

来年度の全国大会(6/6・6/7)は、京都での開催予定です。皆様のご参加を、心よりお待ちしております。

【名詞の真実—「認識はない」、「考えを示す」、は、やめようではないか
—CDA(批判的談話分析)的に見る名詞】

高崎みどり(お茶の水女子大学名誉教授)

報道文で「〇〇氏は、自らは賄賂という認識は無かったという考えを示した。」などと言われると、一瞬もっともらしい感じがしますが、次の瞬間猛烈に腹が立ってきます。それは「私は賄賂を受け取っていない」とは言い切れない〇〇氏と、「〇〇氏は賄賂をもらっていない」とは書けない、かといって「〇〇氏は賄賂をもらっている」とも書けないマスコミとの妥協の産物で、なんとも気持ち悪い表現だからです。ふわふわした、誰も責任をとらない表現です。これを“中立的”と呼ぶのでしょうか。

“賄賂を受け取った”は行為で、こっそりやっても可能性としては外からも見えるものですが、「認識」は頭の中のことでのそれを取りだして「あった」「なかった」といっても本人以外はわかりません。「なかった」と言い張れば、“そりや無かったんですね、あなたのつもりでは”、と言わざるを得ません。また、いろいろと言い訳をしながら言ったであろう「私は賄賂という認識がありませんでした」という表現を、〇〇氏が言った、という直接引用表現ではなく、それを丸めて「考え」と名付けたことになります。すなわち「〇〇氏は考えた」という、三人称の思考を断定する言い方は、報道文としては不自然なので、「考えた」という過程を名詞化せざるをえないからです。〇〇氏が言い訳にいろいろ言った、ということを丸めた表現である“考えを示した”は、間違いではないから、いちおう事実として扱っても差し支えないんじゃない?という理屈でしょう。

頭の中にあるはずの「認識」を取り出して〇〇氏から切り離し、さらにそれらを「考え」でくることにより、問題になっている“賄賂をもらった”という行為はどんどん〇〇氏から離れていきます。つまり他人事のように響くのです。名詞は、流動的なできごとの流れをぴたっと静止させ、ことがらとして形あるものに固めてしまう力を持っています。

名詞で“丸める”テクスト展開そのものが悪いわけではありません。つまり、テクストで何かを論じる時には、状況や問題点の把握を示しながら進めていくのですが、その把握は、より抽象段階の進んだ、端的な語句で示されることが多く、それは名詞であることが多いのです。良いも悪いも、一種のストラテジーとして使用しているのです。

それに関して、CDA(批判的ディスコース分析)における名詞化の意味や、ポライトネス理論における名詞化の意味も、ついつい思い合せてしまします。CDAに関しては、フェアクラフ(2012:216)が、ある過程を表す動詞を名詞化して示すことについて、「意味論的には過程の

「実体への転換である」として、それは「文法的隠喩」であり、「過程が隠喩的に実体として表象されていること」であると指摘しています。ポライトネス理論に関しては、ブラウン&レヴィンソン(2011)が「ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー」のひとつに「名詞化せよ」をあげて、「直感的には、ある表現が名詞的であればあるほど、行為者(actor)は、行為すること、感じること、何かであること、から距離を置くことになる。つまり、述部が行為者の属性になるのではなく、行為者が動作の属性(例えば、形容詞)となるのである。」(p.296)と指摘しています。

名詞、という、文法論的には確固とした所与の存在と見える品詞ですが、テクストの中で見るとなかなか曲者といいますか、興味深い存在です。政治家やマスコミにとっては煙に巻いたり、何かを言外ににおわせたり、力点をずらしたり、といったストラテジーでしょうか。

昔小林秀雄という文芸評論家が「美しい『花』がある、『花』の美しさという様なものはない」(「当麻」)と言ったことは有名ですが、いわば“花の美しさ”的なものを仮設して行かぬ限り、テクスト展開は非効率を抱え込むことになるのかもしれない、とも思います。

名詞の真実の働きは主語になれるだけではないですよ。かたち無きものにしっかりと形を与え既成事実化してしまえる力があります。

このようにテクスト言語学的に語を扱ってみると、いわゆる文法論における品詞の性質とは全く違った言葉の役割分担が見えてきます。文の中にふみとどまる構文論は整合性ある理論的分類・体系を目指しますし、またそれは可能でしょう。実際の文章談話の中で言語現象を見ようとするテクスト分析は、混沌としていて規則的ではなく、傾向しか見いだせないものであるとしても、語の意味や働きについて「あ、今、私、わかった気がする」という実感的把握が伴うものです。

参考文献

- ・フェアクラフ、ノーマン著 日本メディア英語学会メディア英語談話分析研究分科会訳(2012)『ディスコースを分析する—社会研究のためのテクスト分析』くろしお出版
- ・ブラウン、ペネロペ&レヴィンソン、スティーヴン・C 著 田中典子監訳、斎藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野壽憲・山下早代子訳(2011)『ポライトネス—言語使用における、ある普遍現象』研究社

※次回は、安井寿枝先生(関西外国語大学)のリレーエッセイです。

◆『表現研究』123号投稿＆第63回全国大会発表者募集

『表現研究』123号(2026年4月発行予定)の投稿の締め切りは、12月16日(火)です。

「投稿規定」は、表現学会HPの「学会誌」のページに掲載がございます(『表現研究』最新号も併せてご覧ください)。

「投稿規定」の「(5)応募方法」が123号の投稿より変更になっております。投稿の際には、事前に必ず「投稿規定」をご確認ください。

また、2026年6月6日(土)から7日(日)にかけて、第63回全国大会が龍谷大学にて開催されます。

現在、研究発表の発表者を募集しております(研究発表は、7日(日)に行われます)。

氏名・所属・身分を明記の上、発表タイトルと要旨(400字程度)を書いたものを、「お茶の水学術事業会内表現学会担当」まで、郵送もしくはEメール(exp-info@npo-ochanomizu.org)でお送りください。

応募の締め切りは、2026年1月15日(木)必着です。審査の上、発表者として採択された方には、3月初旬までに連絡がございます。

論文投稿＆全国大会発表者募集についての詳細は、『表現研究』最新号あるいは表現学会HPでご確認ください。

なお、各地区例会(東京・名古屋・近畿・広島)の発表者を隨時募集しております(東京例会は、1月、4月、7月、10月の年4回の開催、近畿例会は、10月、3月の年2回の開催、名古屋例会は、不定期の開催です)。

発表を希望する方は、表現学会HPの「地区例会」のページをご覧の上、「地区例会連絡フォーム」よりお問い合わせください。

◆令和7年 関係文献調査

表現学会会員の方々の業績を『表現研究』第123号へ掲載いたします。

2025年1月から12月までにご発表になった著書名および論文名をご報告ください。
(表現研究に関わりのある著書および論文に限ります)

表現学会HPのトップページ「お知らせ」の「関係文献調査はこちらから」をクリックし、「表現研究 令和7年関係文献調査」のページにある、「関係文献調査送信用フォーム」にご記入ください。

締切は、2026年1月末です。ご協力のほど、よろしくお願ひいたします。

◆藤井俊博先生「令和7年度新村出賞」受賞 おめでとうございます

本学会前代表理事の藤井俊博先生(同志社大学)が2025年2月に出版されたご著書『和漢混淆文の生成と展開』(和泉書院)で、「令和7年度新村出賞」を受賞なさいました。栄えある受賞を心からお祝い申し上げます。

受賞の詳細は、一般財団法人 新村出記念財団 Web サイトをご参照ください。

◆◆◆ 広報委員会主催第3回オンライン例会報告 ◆◆◆

2025年10月19日(日)、広報委員会主催によるオンライン例会を開催しました。今回は、昭和百年でトレンドとなっている「昭和歌謡」の中でも、特に「夏うた」の歌詞をテーマに語る企画として、新野直哉先生(国立国語研究所)をお迎えしました。当日は、非会員の方にも多数ご参加いただき、幅広い年齢層・多様な専門分野の方々のご参集があり、和やかな会となりました。

○発表題目 昭和歌謡トーク「夏うた」 歌詞の表現をのぞいてみたら

○発表者(発表順)

湯浅千映子(大阪観光大学) 「夏なんです」・「夏の扉」—松本隆の歌詞の世界—

新野直哉(国立国語研究所) 「夏うた」の表現技巧あれこれ

○司会・オーガナイザー

菊地礼氏(長野工業高等専門学校)・椎名涉子氏(名古屋市立大学)・松浦光氏(埼玉学園大学)

まず、筆者より、作詞家・松本隆の「はっぴいえんど」時代の作品と、職業作家となって間もない時期に手がけた作品の計2曲の「夏うた」をご紹介しました。続いて新野先生より、大瀧詠一、稻垣潤一、杉山清貴、1986 オメガトライブ、TUBEなどの楽曲の歌詞を取り上げ、歌詞に織り込まれた夏のモチーフとなる事物や、夏の風景描写についてご紹介いただきました。

参加の皆さまとそれらの歌詞を共有し、短い言葉に込められた思いを読み解きながら、歌詞全体から浮かび上がる表現の世界を味わうことで、歌詞の魅力や可能性に触れる、心豊かな時間となりました。また、参加者の皆さまと語り合う中で、歌詞の表現に見られる、世代間で共通する(あるいは異なる)夏の記憶や夏のイメージも確認することができました。

酷暑がようやく落ち着いた10月の開催だったからこそ、夏を待ち焦がれ、あるいは夏を惜しむ歌詞の世界によりいっそう感じ入ることができたのかもしれません。

会場からは、「研究発表とはまた違う、ざっくばらんとした雰囲気で楽しかった」、「『夏うた』に歌われるモチーフが、昭和、平成と、時代によって変化していくもの、時代を越えて変化ないものがあった点が興味深い」などの声を頂戴しました。

また来年春にも「歌詞」をテーマにした第4弾の例会の開催を現在、企画準備中です。ぜひご期待ください。(湯浅千映子)

【当日の発表内容】

「夏うた」の表現技巧あれこれ

新野直哉(国立国語研究所)

本発表は、「研究発表」ではなく、あくまで発表者の印象に残っているような表現技巧が使われている昭和の「夏うた」を紹介するものである。取り上げたのは、大瀧詠一『夏のペーパーバック』(作詞:松本隆。昭和 59 年)・1986 オメガトライブ『君は 1000%』(作詞:有川正沙子。昭和 61 年)・稻垣潤一『思い出のビーチクラブ』(作詞:壳野雅勇。昭和 62 年)等の 7 曲(うち1曲は 1 年ほど平成に食い込むが)で、各曲の詞で使用されている比喩や縁語、誇張表現等の技巧に注目し、その解釈の私見を述べた。さらに最後には「付」として、平成期の「夏うた」の 2 曲にも軽くふれた。その後の質疑応答では、今回扱ったような【「夏・海・恋」の三題疇】という設定の「夏うた」が昭和のこの時期に多く作られるようになった背景が話題となった。ところが、当時の若い世代には受け入れられたこの昭和「夏うた」の定番設定は、今日の若い世代からはシンパシーが得られにくいようである。そこには、様々な理由により進んでいるとされる、近年の日本人の「海離れ」が関係しているように思われる。

昭和歌謡トーク「夏うた」で紹介した楽曲 プレイリスト

大瀧詠一「夏のペーパーバック」 作詞:松本隆 作曲:大瀧詠一 編曲:大瀧詠一 1984 年 3 月 21 日発売 アルバム『EACH TIME』に収録

1986 オメガトライブ「君は 1000%」 作詞:有川正沙子 作曲:和泉常寛 編曲:新川博 1986 年 5 月 1 日発売

おニャン子クラブ「夏休みは終わらない」 作詞:秋元康 作曲:高橋研 編曲:佐藤準 1986 年 7 月 10 日発売
アルバム『PANIC THE WORLD』収録

稻垣潤一「思い出のビーチクラブ」 作詞:壳野雅勇 作曲:林哲司 編曲:船山基紀 1987 年 4 月 22 日発売

杉山清貴「水の中の Answer」 作詞:壳野雅勇 作曲:杉山清貴 編曲:松下誠 1987 年 5 月 27 日発売

光 GENJI「サマースクール」 作詞:原真弓 作曲:濱田金吾 編曲:佐藤準 1988 年 7 月 28 日発売 アルバム
『Hi!』収録

TUBE「あー夏休み」 作詞:前田亘輝 作曲:春畑道哉・前田亘輝 編曲:TUBE 1990 年 5 月 21 日発売

はっぴいんど「夏なんです」 作詞:松本隆 作曲:細野晴臣 1971年11月20日発売 アルバム『風待ろまん』収録

太田裕美「夏の扉」 作詞:松本隆 作曲:筒美京平 編曲:萩田光雄 1975年2月1日発売

♪◆◆ 表現学会ブログ・更新中です ◆◆♪

2025年4月より表現学会の公式ブログを更新中です。

会員の皆さまが執筆した新刊書の紹介を中心に、表現学会事務局に届いた学会・研究会、イベント開催の告知やその他学術情報のお知らせ、そして、表現学会事務局からの連絡など、幅広い有益な情報を随時更新しております。

表現学会ブログに掲載したい情報がございましたら、表現学会メールマガジン専用アドレス(hyogen-magazine@hyogen-gakkai-official.org)までお知らせください。

表現学会HPのトップページには、「表現学会ブログ」のリンクがございます。ぜひお役立てください。

♣ 編集後記 ♣

今年度より広報委員を務めることになりました。これまで参加者として学会に関わってきましたが、委員として活動する中で、委員の皆さまの温かい心配りや熱意に触れ、大変励まされました。若い研究者の方にも気軽に参加いただき、活発な議論が生まれる学会づくりに少しでも貢献できればと思います。今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。(椎名)

10月のオンライン例会では、私自身の「推し」である「昭和歌謡」をテーマとした念願の企画が実現し、本当にうれしかったです。全国大会や例会とはまた違った、多くの方々との出会いがあり、集まってきた皆さまの「夏うた」の歌詞に対する思いやこだわりを共有できたことが何よりの喜びでした。名古屋市立大学の椎名涉子先生を広報委員に迎え、東京・中部・近畿のネットワークを生かし、広報活動をより着実に進めていきたいと考えております。どうぞご声援ください。(湯浅)

♣♣♣

広報委員が立ち上がり、2年目を迎えました。新たに広報委員一名を加え、さらに心強い体制となって、今号も「表現学会メールマガジン」を、ニュースレターの形でお届けしました。また、前号より PDF 形式となり、バックナンバーとして、表現学会 HP の「表現学会について」の「ニュースレター」の欄にも4号と5号、第一号から最新号までの「リレーエッセイ」が掲載されており、非会員の方にも読んでいただけます。

このたび寄稿いただいた高崎先生、梅林先生、茗荷先生、新野先生にこの場を借りて御礼申し上げます。

今後も会員同士のつながりを感じていただき、会員の皆さんに親しみをもっていただけるような情報発信に努めるとともに、会員以外の方にも表現学会の活動を広く知っていただけるよう、委員一同、取り組んでまいります。

メールマガジンで取り上げてほしい企画やメールマガジンを通して伝えたい情報・メッセージなどがございましたら、ぜひ表現学会メールマガジン専用アドレス

(hyogen-magazine@hyogen-gakkai-official.org)

までお知らせください。

(文責 表現学会広報委員会)



この画像は、表現学会をイメージして生成AIで作ったものです。

誌名：表現学会メールマガジン 第6号

発行日：2025年11月

発行者：表現学会広報委員会

発行所：お茶の水学術事業会内 表現学会担当

表現学会HP

<https://hyogen-gakkai-official.org/>

※配信停止・配信先変更については、

表現学会事務局

exp-info@npo-ochanomizu.org

にお知らせください。